

Miriam の もう一つの「旅」

梶 原 和 子

Pilgrimage: A Quest for a Vital Relationship

Kazuko KAJIWARA

Received May 1, 1974

Pilgrimage には作者 Richardson の人間の思考や行動の様式についての独自の、ときには奇抜とも思える見解が随所にあって、読者の興味は主題との関連は別として、それ自体の独創性に思わず引き込まれるのである。その一つの例に第12章 *Dimple Hill* のなかで主人公 Miriam の口を通して語られる人間の団欒の形式についての感想がある。人々はまるいテーブルの真中にセンターピースなどを置いて、それを囲んで向かい合うという団欒の形式をとるが、それがいかに人間関係を損なうものであるか。また汽車やバスなどの構造は人々が顔をつき合わせることを余儀なくしているが、それがいかにも多くの不必要な不快さを生み出しているか、というのである。一般の人々が当然のこととして見過しているこうした人間の日常的 behavior について問題を提起し、それにユニークな解釈を試みている。彼女によると向かい合ったときの人々はそれぞれ「自分自身の光のなかに立っている」が、そのことがいかに人間関係を阻害するか。人々はどこにいても横に並んで坐って、「ものに向かって、もののなかで出会わなければならない¹⁾」。向かい合ったときの人々は一度しか出会うことができないから、というのである。

この Richardson の感想は主として男女の関係について述べられたものであるが、「自分の光のなかに立つ」とか、「もののなかで出会う」といった暗示的な表現でとらえられている恋人同士の、あるいは夫と妻の関係はいったいどのようなものをいうのか、また Richardson の作品のなかでそれが主題とどのようなかわりを持っているのか、といった疑問が当然頭をもたげてくる。Horace Gregory は *Dorothy Richardson: An Adventure in Self-Discovery* のなかで、実生活での Richardson は主義に従って夫 Odle との団欒で決して向かい合って坐ることはなかったとだけ述べているが、この作者にとってこの主張がそれほど根強いものであったとすれば、作品のなかでなにげなく語られる前述のことばにも主題との深いつながりがある筈である。

この問題を探るには Richardson のほう大な自傳的告白のなかに登場する男たちと主人公 Miriam の交渉のドラマと、それが彼女の意識に落した影を見ていかなければならないが、さいわいにその材料にこと欠くことはない。Caesar Blake が *Dorothy Richardson* で指摘しているこの作品のテーマ、つまり人生の真実追求のための遍歴を支えるものの一つとして Miriam の豊

富な恋愛体験があるからである。同時にそれを点綴する作者の男性批判も通りいっぺんのものではないだけに、見過すわけにはいかない。

一人称小説とも、自傳的告白とも規定できない *Pilgrimage* の自由な形式は、作者が人間や社会についてのさまざまな見解をさし挿むことを容易にしているが、なかでも執拗とも思える熱意で展開されるのが彼女の男性批判である。20世紀初頭の女性解放の気運にのっていたとはいえ、独自の論拠から他の女流作家には例を見ない真剣さをもってこの問題と取り組んでいる。同時代の Virginia Woolf の作品にも同じような立場からする男性批判は散見されるが、量の点で比較にならない。*Pilgrimage* はまさに男性および男性優位の文明に対する告発の書といえる一面を持っている。

Richardson の観点の一つはフランスのボーヴォワール女史などと同じく、歴史的に形づくられてきた男性優位の文明から見ようとする立場である。家父長制社会の名残を濃厚にとどめている社会で、あらゆる分野で主導権をとってきた男性、それに対して副次的な役割を押しつけられ忍従を強いられてきた女性、という常套的な発想から出発する。そのような歴史的宿命のもとにおかれた女性の属性が男性の目に劣ったものとして映るとしても、それはそのような文明を作り上げ、そのなかで女性を飼いならしてきた男性の責任であるというのである。

Richardson のもう一つの立場は男女間の生理的な相違に由来する属性の違いを見る立場である。つまり男性の論理的思考法に女性の感覚的直観的方法を対比させて、両者の認識方法の相違を見ることから始める。これは男女の認識方法の相違を論ずる際に一般的にとられる発想法であって、とり立てていっほどのことではないのであるが、Richardson に特徴的なのは女性の方法は生の現実への完全な理解を可能にするのに対し、男性の方法は盲目にしてしまうと断定している点である。女性は才能、教育の有無にかかわらず、ものごとの本質や意味を直観的に知ることができるが、男性はものごとを概念的にとらえてそのために本質や意味を見逃してしまうというのである。加えて、男性優位の文明のなかで男性が享受する思考の訓練がことばという武器を磨かせ、巧みな言いまわしを綴らせ、書物を積み重ねさせ、ますます真実に対する目をくもらせてしまうという。これについては作者自身の言いまわしを参照すると思いたい。

Clever phrases that make you see things by a deliberate arrangement, leave an impression that is false to life. But men do see things in this way, disposing of things, and rushing on with their talk; they think like that, all their thoughts false to life, everything neatly described in single phrases that are not true. Starting with a false statement, they go on piling up their books.²⁾

これは Miriam の下宿の持つ独特のムードを男性の同宿人が 'There's not many stays 'ere long; them as stays, stays always.' と言言のもとに要約してしまう無神経さに対して述べられたことばなのであるが、作者の舌鋒はこのような市井の平凡な男性に対するよりも鋭く著名な思想家、小説家に向けられる。例えば Conrad に対しては、その文学の価値を十分に認めながらもその男性的な現実認識（とくに女性の資質について）や表現法 (the phrase so smooth and good that it almost compels belief)³⁾ が読者の意識に poisoning gloom を投げかけると言っている。巧妙な言いまわしで人生の真実を照らすかと見せて、表面をかすめていってしまう、そのことが

読者の意識をくもらせ、有害な影響を及ぼすとしている。ほかに Huxley や Gissing などについて同様の感想をもらしているが、一流の思想家、文学者に対するこうした告発は無謀で独断的とのそしりを受ける恐れがあるにもかかわらず、Richardson は feminine point of view から臆せず、堂々と議論を展開している。そのほか男性の行き過ぎた科学尊重の立場がもたらす現実軽視についても鋭い批判の目を向けている。Woolf も男性の過度の合理精神が反面持っている認識上の欠陥といったとらえかたをしているが、一方では男性のすぐれた知性、思考力に対する敬意の念を隠すことはしない。Richardson は Woolf のことをほとんど語ることがをしないが、ただ 'half-diluted male' と評しているのは一つにはこのような妥協的な立場に対する不満を表明したものである。女性の認識方法のすぐれた特性に焦点を合せている Richardson は時に姿勢をゆるめて女性の愚かさを歎き、男性の知性を賞讃することはあっても、基本的にはその論理的思考法の画一性・盲目性を糾弾する立場を貫ぬいている。ついであるが、もう一つ特徴的なのは冒頭にかかげた団欒の形式についての見解に見るような、ユニークな着想と前提から出発して、通念とされている概念をくつがえして見せる独特のロジックの面白さである。

この特有のロジックを駆使して両性間の認識方法の相違を執拗に例証しているが、とくに興味深く、また多少とも本題と関係があると思われるのは Richardson のいうところの sense of atmosphere の比較である。彼女によると女性は意識的無意識的に atmosphere を作り出す能力を持っているが、男性は百万人のうちの一人も持っていない。それは空気のなかの空気のようなものであり、時には人を閉じ込め、息の根をとめてしまうほどの破壊力を持っているが、最良に発揮された場合には生命を養う山の空気のような厳しい美しさを持っている。つまりすぐれた芸術作品の属性を備えており、それを作り出すためには最大限の detachment と control を必要とする。これこそ女性の作り出す芸術で、この意味では一人一人の女性は creator, originator, artist ということができる。男性はそのなかで生き、それをかてとしながら意識さえることができないというのである。これは Richardson が男性の civilization に対して想定している女性の civilization というものの根定をなしている発想であり、social being としての女性の特質に対する彼女の洞察を示すものである。端的な例を挙げれば、ある家の戸口まで来れば直ちにその家の女主人の作り出す atmosphere を感じ取ることができるというのである。Woolf も *To the Lighthouse* の Ramsay 夫人、*Mrs Dalloway* の Dalloway 夫人を通じ、女性の個性が発散するムード、感化力といったものを独特のイメージを駆使して伝えている。女性のムード、雰囲気に対する過敏性は心理学的にも指摘されていることではあり、Richardson と共に当時盛んになった女性心理学の影響を受けたことは想像されるが、後者に特徴的なのは、これに積極的な意義を見出し、新しい価値感から一種の女性文明論に発展させていることである。

このように徹底した男性弾劾の立場を堅持しながら、Richardson は *Pilgrimage* の主人公に多彩な男性遍歴を経験させ、主義に殉じて目覚めた女性の孤塁を守るといったかたくなな姿勢をとらせない。Blake の指摘している人生の真実探求の pilgrimage と並行して、Miriam の豊富な恋愛体験を通じもう一つの pilgrimage が意図されていることは Miriam に、男たちと出会い、馴染み、別れて行く過程を travel と呼ばせていることからもうなずける。そして人生の哲学探究の pilgrimage において、種々の哲学的、宗教的、政治的思想を吟味し、取捨選択していったように、もう一つの pilgrimage でもいろいろの個性を持った男性の真実を確かめながら遍

歴をたどっていったということができる。この作品の終り近くで登場する Richard Roscorla についての Miriam の独白、「あなたはテストにパスした。私が考えていたよりも完璧に⁴⁾」がこのことを裏書きしている。

Miriam の意識に impact を残した男性は行きずり程度の人々も含めると十指に余るほどであるが、ここではとくに交渉の密度の高かった Hancock, Densley, Michael, Hypo, Richard の五人に的をしぼり、Miriam の人生遍歴とのかかわりあいを見ていくことにする。彼らとの交渉の歴史は連続的なものではなく、複雑にからみ合っているので、一応整理してみると次のようになる。

Hancock は第4章 *The Tunnel* で登場する、Miriam の勤務先の歯科医であり、この章のうち早くも主役の座を降りるのであるが、第11章あたりまで脇役として残る。Densley も同じく *The Tunnel* の終り近くで登場する医師であるが、Miriam との関係は第10章 *Dawn's Left Hand* で頂点と冷却を迎え、やはり第11章あたりまで続く。Hypo Wilson は *The Tunnel* で登場する妻帯者で、第10章後半で主人公ととくに親密な関係を持ったのち、最後まで彼女の生活圏を離れない。彼は作者の生涯の友人 H. G. Wells をモデルにしたといわれているだけあって、その存在は終始主人公に大きな影響力を持っている。Michael Shatov は Miriam の同宿人として第6章 *Deadlock* の冒頭から登場し、この章のうちに彼女との関係は頂点と破局を迎えるがなお長く舞台を去らない。Richard Roscorla は第12章 *Dimple Hill* で登場する Quaker 教徒で、最終の第13章 *March Moonlight* で Miriam との訣別を迎える。これに彼女の心を強くとらえた数名の男たちの短いつながりを重ねていくと、その男性遍歴は複雑にからみ合って、一つの図式として引き出すことは難しい。

この数多くの男たちが Miriam との接触の過程でそれぞれ一度は結婚の、あるいは free love の対象として考えられるのであるが、彼らはどのような角度から彼女の人間観のなかへ受け入れられ、また退けられていったのであろうか。彼女には固有の神秘的な人間観があり、経験の蓄積と滲透により生々発展する動的な自我のほかに、経験に制約されない超時間的で静的な、人間に内在する神性ともいえる普遍的な自我を想定しており、そのような自我の独自性と主体性を確立するためには絶対的な孤独は必ずしも要件ではなく、むしろ愛によってのみ達成しうるある vital な人間関係があり、それは当事者の資質と意志を生かし、またそれによって生かされるものであるとする考え方に立っている。Blake によればこれは当時イギリスの知識人の間に影響力のあった J. M. E. McTaggart の哲学的理想主義の立場からする人間観に近いものであるが、*Pilgrimage* の初期のうちから Miriam の人生観の一部を構成していたことは第2章 *Backwater* に見られる次の一節からも明らかである。

She discovered that a single unexpected glance, meeting her own, from a man who had the right kind of bearing could disperse all the vague trouble she felt....., and send her gaily forward in a glad world where there was no need to be alone in order to be happy. A second encounter was sad, shameful, ridiculous; the man became absurd and lost his dignity, the joyous sense of looking through him right out and away to an endless perspective, of being told that the endlessness was there and telling that the endlessness was there, had gone.⁵⁾

これはすでに体験した青春の淡い恋についての述懐であるが、ここに想定している人間関係の pattern とでもいえるものは、right kind of bearing を持った人との出会い、人格の触れ合いによる苦悩の解消と意識の高揚、再会のもたらす幻滅と失望といった図式である。結論を先にいえば、これらの男たちとの交渉のいきさつは、その過程の形態上の違いはあっても、また図式の完成の度合いはいろいろであっても、基本的にはこのような経過をたどって Miriam の世界に impact を残し、また去っていったと思われる。Richard が Miriam の期待以上にパスしたテストは何であるか。いうまでもなくこの endless perspective を共有することができるかどうか、またその経験を持続することができるかどうか、ということである。Miriam の述懐によると、Densley とは一度、Richard とは二度、こうした境地に達することができたのである。しかしながらこのような関係にいたらなかった Hancock, Michael, Hypo も他の二人に劣らぬ impact を残したことは彼らとの交渉の歴史を見れば明らかである。あわせ考えて、Miriam の想定する vital なある種の人間関係とはどのようなものであるか探ってみることにする。

自我の確立と精神の自由を至上のものとする Miriam の愛の対象として考える場合 Hancock の存在は読者にもっとも違和感を与える。彼はイギリス中産階級のなかでも特異な地位を占める professionals の層を代表する男である。優雅で洗練された、しかし因襲的、閉鎖的なその世界を Miriam は ready-made world, shut-in world と評し、そこに住む男たちの現実認識の不完全さを初めから見抜いていたのである。‘Never, never could she belong to that world⁶⁾’ といいながら、彼女の心情のどこに彼との交友が愛の自覚にまで深まる素地があったのであろうか。一人称小説の特徴として読者は語り手の口を通してしかものごとの推移を知ることができない不便さと作者の抑制の効いた表現もあって、‘Where we have been, we have been. That is not imagination.⁷⁾’ といった語句にぶっかり、その真意を推し測って初めて愛と認められるものがあったことを知るのであるが、そのきっかけとして考えられるのは、彼の持つ個性の魅力である。Miriam のような意識の高い女性に関して、これはまことに通俗的なとらえ方と見えて、実は意外にも真実をうがっているともいえる。彼女の異性に対する approach のしかたはいわば一目惚れと要約できるていものが多いが、前述の彼女のことは通り、彼らの持つ right kind of bearing に瞬時のうちに彼女の直観が感応したものと解釈してよいと思う。この right kind of bearing がいわゆる容姿のみを指すものではなく、彼女の sense of atmosphere がとらえた全人格的な輝きのようなものであることは第5章 *Interim* でのカナダ人 Von Heber との出会いの描写に見る通りである。

‘My name’s Von Heber,’ he announced quietly, his restrained, uncontrollably deepening smile sending out a radiance all around her. It was as if they had met before without the opportunity of speaking, and here, at last, was the opportunity and they had first to smile out their recognition of its perfection.⁸⁾

この魅力的な個性の持主とは初対面であるのに再会であるかのような錯覚があり、その再会のすばらしさを喜び合っている錯覚があるという手のこんだ認識のしかたで、この作者の得意とする精緻をきわめた内面描写の一例である。

次に There had been a meaning in Mr. Hancock from the beginning, a sort of meaning in

her privilege of associating with fine rare people.⁹⁾ と認めているように、この時期の Miriam の心情の根底には、彼らの世界に対する淡いあこがれがあったようである。商人であることを恥じ、常に実力以上の体面と威信を保とうとして失敗した父を恥じながら、心のどこかにまだ父の血から受け継いだ意識がよどんでいたのである。Hancock と彼の世界の人々の意識のくもりを批判し、自己の資質の優越性を誇示すればするほど (A moment of my consciousness is wider than any of theirs will be in the whole of their lives¹⁰⁾), 彼女の血のなかにある抜き難い劣等感と向上意識をかえて露呈する。彼に対する Miriam の意識の大きな部分を占めているのは彼女が「あったことはあったのだ」と認めている愛の感情よりも、こうした階級意識であり、このあたりの自己表白はこの時期の Miriam の未分化の意識構造、ひいては平均的イギリス人の階級意識の反映といえることができる。

Hancock の保身のための拒否によりこの恋の進行は阻止されてしまうのであるが、誇を傷つけられた Miriam の反応は失望と怒り、その反動としての現状合理化を経て、次の旅への期待感に弾む traveller のそれである。

Michael Shatov との交渉の高い密度は第6章 *Deadlock* 全体にわたって維持される。それだけに人間 Michael は Hancock には見られない具体性、奥行をもって読者の前に大きくそびえる。彼のすぐれた頭脳、知識、感受性、豊かな人間性との接触は Miriam の単調な日々に変化を与え、彼は彼女の glow of life となっていく。二人の間で快い対抗意識のうちに交される議論は人間、社会のあらゆる問題に及び、とくにイギリスとロシアの言語、文学、文明の特質の比較には小説的興味とは別の面白さがある。Miriam の思想の根底にある徹底した個人主義と Michael の社会主義的立場はぶつかり合って互いに一步も譲らず、快い緊張感のみなざる洗練された人間関係を作り出す。彼の決して強引ではない語り口、すぐれた聴き手としてのポーズ、人間同士の理解を深めるものとして雄弁よりも沈黙を尊ぶ姿勢はロシア人的特性として Miriam の心を打つ。

Nothing could be known except in solitude. But the struggle to communicate certainties gave them new life, even if the explanation were only a small piece of the truth.....The extraordinary thing was that she could think, untroubled, in his company.¹¹⁾

As long as he stayed, he could be there, without effort or encouragement from her, filling her spare hours with his untired beauty, drawing her along his carefully spun English phrases, away from personal experiences, into a world going on independently of them.¹²⁾

この緊密な精神のつながりには Hancock との関係には見られない信憑性がある。前述したように二人の間ではいわゆる endless perspective は望めなかったのであるが、ここに描かれた境地はいわばその一步手前のものといえる。

ここにいたると、‘It had been love all along.’ という Miriam の愛の表白は自然なものとして受け入れられる。ところが高まった感情のしるし (kiss) が交されたあとの男の不用意な言動で形勢は一変する。愛を勝ちえた心のゆるみからか、過去の女性関係を告白するのであるが、‘For pity’s sake, don’t touch me!’ と身を引く Miriam の反応には生理的嫌悪感がうかがわれる。驚いた Michael は若さと人間的弱さを弁解としてひたすら許しを乞うが、彼女の彼を見る目はもはや恋人のそれではなく、feminine point of view からする覚めた人間観察の目である。

This was the truth behind the image of woman supported by man. The strong companion was a child seeking shelter; the woman's share an awful loneliness. It was not fair.¹³⁾

過去ある男性への拒否からは女性の倫理的潔癖感が連想されるが、自身の反応に対する Miriam の分析は彼女特有のものである。いまこの男は身を低くしてひたすら許しを求めている。許しを与えることで二人の間には神聖な契約ができあがり、未来にはこの契約を守るための緊張と専心しか残されない。もはや夢を見ることも、心を解き放すこともままにならない。どうして男性にはこうした契約の意義と重大性が分らないのだろうかと自問する。あやまちを許すことの倫理的意義が問題にされるのではなく、それを容認する行為が人間の精神の自由をいかに束縛するか、という人間存在の根源にかかわる問題としてとらえられている。許すことからくる負い目は許される側にあるのではなく、むしろ許す側にあると見なす、この上なく厳しい自我確立の決意といわなければならない。

Michael との関係は従前通りになおしばらく続くのであるが、このできごととは読者の意識に大きな余韻を残し、Miriam の心に占める彼の glow はもはや落日のそれに過ぎないという印象をぬぐい去ることはできない。同時にこのことが Miriam の pilgrimage において持つ意義について考えないわけにはいかない。これまでの二人の関係は互いの知性と感受性に対する理解と敬意の上に成り立つものと信じるようにしむけられていたために、このように Michael の過去にこだわりの、またそれにこだわる自己の立場をこのようにひややかに分析し合理化する Miriam の心情は説得力に欠けるものがある。彼女は男女間の愛の形態についてはかなり自由な考え方を持っており、ほどなく親友 Alma の夫 Hypo の情婦となるにあたっては、いささかのためらいも示していないのであるから一層その感が強い。この事件にさきがけて Miriam は Michael がユダヤ系であることを知り、そのことを ‘the hidden flaw……as there was always a hidden flaw in all her possessions¹⁴⁾’ と言っている。つまり彼のユダヤ人としての identity を彼女の所有物の隠れたきずと意識しているのであるが、彼の過去の露顕という非常事態に直面して、そのきずに対して持っていた意識の不安定な要素が人間に対する評価の基準を一瞬狂わせて、とくに Michael の過去を大きくクローズアップさせたのではなかろうか。別のところで Miriam は *Merchant of Venice* における Portia の扱い方に言及し、彼女のユダヤ人に対する非情な態度はキリスト教徒の自己満足のあらわれであって、女性の本心を示すものではないとして、女性の内面の現実に対する Shakespeare の洞察の不完全さを衝いているが (There was no reality in any of Shakespeare's women¹⁵⁾), ユダヤ人 Michael の扱い方にこの analogy を見る思いがするのはいささか皮肉である。Richardson の意識構造のどこかかにキリスト教徒通有のユダヤ人観がひそんでいて、それが Miriam の pilgrimage のパターンに不可解な要素を持ち込んだと見ることもできる。

それはさておき、このできごとを境にして、Michael の人生観の限界がいろいろな角度から検討されるようになる。結婚を含めた人生の現実についての概念的な把握の仕方、人間の内面の現実に対する不完全な認識などであるが、これらは彼女と交渉を持った殆んどすべての男性に通有のものであり、Michael にも初めからあったのであるが、俄かに大きく心を占めるようになる。しかしもはや彼の民族性に対する偏見をいささかも感じさせない平静さで、一人の人間としての彼の現実認識の限界を独得の精緻な筆法で描き出している。その一つの例は彼女が人間関係に絶

えず求めたものを示していると思われるので引用してみることにする。

He would go on reading, all his life, sitting as he was sitting now, grave and beautiful; with a mind outspread in a mental experience so wide that he was indifferent to the usual ideas of freedom and advantage. Yet he did not seem to be aware how much the sitting like this, linked to the world by its deep echo in the book, was a realization of life as he saw it. It did not occur to him that this serenity, in which were accumulated all the hours they had passed together, was realization, the life of the world in miniature, making a space where everything in human experience could emerge like a reflection in deep water, with its proportions held true and right by the tranquil opposition of their separate minds. She summoned onlookers, who instantly recognized themselves in this picture of leisure. It was in every life that was not astray in ceaseless movement. It was the place where everything was atoned.¹⁶⁾

あくことを知らない読書と思索によってMichaelの知的経験は無限に広がる感があるのに、二人の間に横たわる静かな空間に、見ようと思えば見られる、二人の過去の経験の総和や、全人類の体験の縮図を彼は見るができない。知的活動をふくめたあらゆる活動を停止して、一定の姿勢でのぞめば、その空間のなかに、そうしたものとすべての意義や相互関係が浮び上がってくるのに、というのである。日常的な活動を一時停止して、一步退いて過去の経験や人生の意義について観照することの意義を説いているところであろうが、Michaelについて‘Why did he not perceive the life there was in this sitting tranquilly together? Was he thinking of nothing but his reading?’と言っていることからして、彼が推理や判断などの思惟作用にさまたげられて、現象の背後にある目に見えないものを直観する力を鈍らせ、眠らせていることを衝いているのだと思われる。このMichaelに見えなかったものがMiriamのいうendless perspectiveであるかどうかは疑問であるが、少なくともこれも彼女が真の人間関係に求める条件の一つであることはうかがえる。ともかくこれをもって落ちた偶像としてのMichaelの姿はMiriamの遍歴の路傍に退くことになる。

DensleyもHancock同様Miriamのいうfine rare peopleの一人で、後者の排他的な人間観と生硬なエリート意識に対し、世慣れた包容力と暖かい人間性が僅かに対照的である。したがって彼の人間、人生についての認識もMiriamにとっては同じく不完全なものでしかない。体制に組み込まれた社会人としての生きかただけが彼の関心事であり、人間そのもの、人生そのものの現実について盲目に等しいと見る。

In life itself, there seemed for him to be no splendour. For men there was ambition, hard work and kindly deeds, for women motherhood¹⁷⁾.

Miriamのような女性の内面生活は彼にとって不可解なものであり、一方Densleyの住む世界は彼女にとって閉ざされた異郷であった筈である。しかし彼には彼女の周囲の社会主義者、無政府主義者、婦人参政権論者などの存在を容認するだけのおおらかさがあり、彼女には彼の優雅で華やかなman-of-the-world societyによる眩惑があって、Miriamの秘めた葛藤にもかかわらず、

二人の関係は単なる友情以上のものに育っていく。そしてこれまでの男たちの場合のような危機をはらんだドラマの展開の代りに、the passing of the strange experience of sharing with him an instant of eternity¹⁸⁾ を経験する。

ロンドンでの精神的、肉体的緊張の日々からの休養を Densley からすすめられた Miriam がスイスの保養地に遊んだあと、彼を診療所に訪ねたとき、そのような瞬間がふと訪れる。普通ならば手を差しのべて笑いながら彼女を迎える彼が、今日は仕事から目を離さないで彼女をじらす。旅先からのあまりに衝動的な、愛情あふれた手紙が彼に自信を与えているのだとすれば、彼との別れも速くないと考えながら Miriam はこの不思議な瞬間を迎える。

This progress across the well-known room was the prelude to farewell. Glancing away from him towards its further space, she became aware of a deep peace and her eyes returned to him. Still holding, as if he were alone, his tranquil pose, he was waiting for her to recognize this peace as the reality beneath their differences....The living peace in the room was like a light that seemed to flow towards them both from the corner that formed a triangle with him where he stood and herself where she stood; or to flow from each of them and meet exactly in the corner towards which at their different angles they both faced.¹⁹⁾

このくだりの後半の部分に Richardson のいう向かい合っていない人々の間に起り得る状況の典型が描かれている。静かな雰囲気の中で二人が一点を見つめて立っていると、いろいろな矛盾を超えて二人の間に平和な空気が流れる。それは一点からそれぞれに向かって流れる光、あるいは逆にそれぞれから一点に集まる光として Miriam にとらえられる。そして二人はその一点の中で一瞬たしかに出会うことができたのである。

この直後、Miriam は「これは不思議でも何でもない。だれとでも静かに待っていれば、ときどき待つことのできる瞬間である。ケルトの魂を持った彼には分る筈だ」と言っている。「だれとでも」と言っているのは、彼の血の中にあるケルト的感性が彼女の作り出す雰囲気を受けとめて深まる彼女の意識を助けた、そして前の二人とはなかった一瞬の魂の触れ合いを現出させたといえることができる。

最終章 *March Moonlight* で Miriam はこの瞬間の経験をふりかえり、「あの瞬間はわれわれの人格の矛盾を超えた神聖なものであった」と述べ、さらに、

Only in silence, in complete self-possession, possession of the inwardness of being, can lovers fully meet. An enthusiastic vocal engagement is a farewell. Marriage usually a separation, life-long, unless resting upon the foundation of shared belief.²⁰⁾

と言っている。possession of the inwardness of being とは沈黙と意識の集中により、現象の世界から目を人間の心のなかの現実に向ける努力をいうのであろうが、Densley の心のなかをわれわれは見ることができないので、彼のかかわりがどの程度のものであったかは知ることができない。少なくとも二人の間には shared belief というよりも shared sensation に基づく神秘的な調和の瞬間があったといえよう。

Miriam は彼とこのような瞬間を持ったことを忽ち後悔し、この雰囲気を追い払うために雑念

をよび戻そうとするのであるが、意図に反してもう一度同じような瞬間を迎える。「これは人人が新婚旅行に行くところだ」と言って彼が差し出すベニスの運河の写真に見入っているとき、水とゴンドラと月の光の幻影のなかで彼と彼女から出た光が期せずしてまた出会おうとする。二人の間の根本的な矛盾をよそに奇蹟を予期している彼女の意識を、「君はまだ新婚旅行をあざ笑っている」という彼のつぶやきが襲うと、その瞬間に幻想は破れ去る。

He was gone. The light flowed back into herself as she turned and saw him standing tall and upright, elbow on mantelpiece, several feet away, saw his face as nearly stern as in its changeless kindness it could ever be.²¹⁾

目の前の一点で彼からの光と出会おうとした彼女の光はもとのところへ戻ってしまう。ともかくもう一度彼との出会いを試みようとする彼女の妥協を新婚旅行ということばに象徴される彼の保守的な結婚観がぶち壊してしまう状況をこのようなイメージで現出してみせる Richardson 得意の場面である。このあと「Densley との訣別は祖先の生きてきた道への訣別である」と言って、Miriam はまた新しく人生創造の旅にのり出していく。

Densley や Hancock の世界は Miriam の血のなかにある genteel なものへのほのかな郷愁をゆさぶったのであるが、Hypo Wilson の世界は彼女の知的、文化的なものへの強いあこがれを刺激したのである。彼をめぐる Lycurgan (Fabian?) Society の人々に集約された知性や社会改良への情熱は Miriam の心に快い興奮を引き起す。長い旅のすえにやっとめぐり会えた、これらものを考え、ものを書く、古い世界観から解放された人々こそ、自己のなかにある飢えのようなものを充たす人々だと感じる。なかでも Hypo はすぐれた知性、説得力、行動力を持った強烈なパーソナリティとしてはじめから彼女を圧倒する。ひろく政治、思想、芸術にわたる彼との議論を Michael との場合以上に自己の知性、理解力への快い challenge として受けとめる。彼から人間生活のしくみについての理念を学び、新しい体制づくりへの彼の企画に加わる意思を固めるときさえある。しかしやがて Miriam が彼や Lycurgans の世界観の底の浅さに気づくときがくる。あまりにも機械論的で剛直した彼らの構想には人間生活の豊かなニュアンスを盛り込むことはできないと感じるようになる。彼女のことばを借りると、「くらやみのなかでも生きている名状しがたいものを生かす余地を残していない」、また「人生や世界についてのどのような解釈も、じつに全くの無計画さえも、彼の最良の仮説よりも望ましい²²⁾」と思われる。彼の日常を大きく占める行動は人間の孤独を追ひ払うと同時に「なまの生活の実感」を鈍らせてしまう。そのようなペースに巻き込まれることは他者の精神の収穫したものと引きかえに自己の主体性を明け渡すことになり、それは死よりも恐ろしい生を意味すると考える。

このように Miriam の理性は Hypo の知性の影響下から逃れて、あらためて自己の人生を創造することの必要性を強く認識するのであるが、異性としての彼に対する心情はその決意としばらく連動しない。彼の個性の吸引力はなお強く、彼との関係は好意から愛へ、さらに親密な結びつきへと発展する。

Hypo も二人の思想的基盤の決定的相違を認識しており、それを ‘you think to live, I live to think’ などと要約するが、揺れ動く Miriam の意識を察知して、彼女をつなぎとめておくために、彼女の基盤に立って、視点を共有しようと試みる。二人の交渉の歴史の頂点ともいべき密

会の席で、対話のとぎれに生じた静寂のなかで、Miriam がひとり自己に沈潜し、永遠に通じる意識を持ち始めるとき、彼もまた参加しようと一応の努力を試みる。

Called by his unusual silence to glance across the separating inches, she saw that he was being grave, apparently quietly abstracted. Honestly, quite honestly, and sincerely he was playing up to her, venturing unarmed into the desert shared life became for him whenever deliberate, incessant gaiety was in abeyance, whose destructive power he yet knew as well as he knew its joys.²³⁾

Miriam にとっては愛する人と沈黙のうちに深める意識の共有は心のなかに光輝やく風景を現出するが、Hypo にとっては索寞としたムードしかもたらさない。この沈黙に彼本来の陽気な饒舌が割り込めば破壊しかないことを知っていて、このたびだけは gaiety を遠ざけて彼女の示す条件下で時の経過を待つことにする。Miriam は彼のこの涙ぐましい努力に心を動かされたものの、彼の忍耐には限度があることを知っている。彼の見せかけの自己放棄のうらには計算があることも、彼女の沈黙を女性に通有の空虚な沈黙としてあざ笑っていることも知って、Miriam は彼の面前でひとりであの self within herself who was more than her momentary self を到達しようと試みる。

Almost arrived, almost down in the innermost sphere of happy solitude, drawing the first deep breath of its fresher air that was like air coming across the sea at night, she was halted by the watchfulness of a swift glance, a ray immediately withdrawn.²⁴⁾

夜の海をわたる風のような清澄な境地のなかで息づかいを始めようとするとき、彼のさめた一べつが幻想を破壊してしまう。やはり彼の実験的参加は彼女が見抜いていたように短命で、彼の知性の凝視の前に彼女の感性の触手は萎縮するほかはないのである。この Miriam が恋人の面前で初めて試みる単独の意識の深化、それに対する彼の反応を見るやり方は、彼との交渉の岐路に立って彼の人間性の真価を試すための一つのテストと見ることができる。その結果、彼の人格との調和はやはり望むべくもないことを知った Miriam の、彼に対する評価は決定的なものとなり、彼の個性による呪縛から完全に解放されたことを自覚するのである。

Hypo と Densley は思想、信条の違いはあっても、Miriam の見るところ人生の現実に対する認識のしかたに大差はないのに、彼女の魂との接触の度合いが異なるのは両者の資質の相違によるものと思われる。Miriam は現実認識の方法や度合いにより人間を ‘manly woman’ ‘womanly man’ などのように色わけするのを好むが、Hypo は彼女の接した多くの男性のなかで最も ‘manly man’ といえることができよう。じっさい彼女のいう sense of atmosphere にいかにか彼が無感覚であったかを示す場面が用意されている。前述の場面の続きで、Miriam が彼からの手紙が手もとに届くときの自分の意識の状態を彼に説明するくだりである。郵便物が函のなかに落とされるとき rat-tat という音を聞いただけで、すでに閃きがあるという Miriam のことばを「とき澄まされた知覚の一例だ」として軽く受け流す彼に対する反発は痛烈である。

Even if he were different, believing in an unseen world and an unseen power in com-

munication with every single soul, even if he could suddenly be turned into a believer and her own man and partner, she could not tell, in words, what had happened in the moment of reading. He was in the midst of truth, surrounded by it as she knew it to be, but not willing to attend to its intimations.²⁵⁾

彼がかりに現実の彼と正反対であって、内面の世界への vision と思想、信条を彼女と一にしている、目の前にある一つの真理に盲目である、この一事をもってしても彼を失格と見るわけではないとしている。この場合の真理とは彼女の鋭敏な感覚でとらえた、彼との間をつなぐ目に見えない糸のような何かである。彼女にとっては何よりも確かな実在であるのに、彼には概念的には掴めても、その実在を肌で感じとることはできない。Richardson が男性に見るところの真理への盲目性とは、このような認識上の欠陥を意味しているのだということがわかる。男女が真に出会うことができるのは共通の信念の上で、と作者は述べているが、それよりもまず共通の認識の上で、といった方が当を得ているのではなかろうか。

第12章 *Dimple Hill* で登場する Richard Roscorla は主人公が出会うすべての男性のなかで最も可能性を秘めた男性ということができる。彼は人生の転機に立った Miriam が心身の疲労をいやすために静かな田園で求めた下宿先の Quaker 教徒一家の長である。この時点の彼女は Blake のいう真理探求の遍歴も極まり、自己の心のうちに神の実在を啓示的な瞬間を通して実感するにいたっており、この意味からは Quaker と世界観を一にしている。このような時期に、平和な光に溢れた *Dimple Hill* の自然のなかで、神を常に心に感じながら生きる Richard にめぐり会えたことは意義深い。彼の静かなものごしと素朴さ、深い信仰生活からくる重厚な個性は Quaker 的価値体系の具現として Miriam の心を強くとらえる。都会ずれした卑俗な自己の姿を恥じて、ためらい勝ちに接触を重ねていくうちに、これまでに経験した都会の talkative males の持つ知識や趣味とは異質の教養を彼に見出す。彼とともにあるとき、かつて経験したことがない豊かな静寂が身を包むのを覚える。このように彼と彼をとりまく環境の魅力に無条件に屈服したとき、次のような瞬間を経験する。

That instant wherein she had cried out, gently, lest the wild beast, hearing her, should banish itself before he saw it, was the only one in their tour having depth, the only shared moment. Together they had gone down into it, blended, indistinguishable, she the pioneer's mate sighting the enemy, proud to announce in one word both its presence and her knowledge of its malevolence, he at her side in an equality of pioneer watchfulness.²⁶⁾

これは気晴らしにぶどう摘みをしていて、迷い込んだ鳥の姿に視線が落ち合い、二つの魂が融合した様子を描写したものである。未完に終わった Hypo との体験のように集中に向かう意識的な努力なしに、期せずして到達した境地である。二つの親和力を持った人格が偏見もわだかまりもなく対等の立場で向かい合えば、ことばの媒介なしに苦もなく完璧に融け合うことができることの例証である。共同の敵に立ち向かう開拓者とその仲間という効果的なイメージがこの二人の意職の密着の度合いをよく表わしている。彼とはもう一度このような短いが完璧な出会いを達成するのであるが、この二つの経験がもとで、のちに訣別を前にして心のなかで、Richard がテス

トに完全にパスしたことを讃え、「あの二つの瞬間の内容があなたの人格の証明書である」というのである。かつてない程度の親近性がこの二つの人格の間にあったことは確かであるが、やはりここでも問われているのは思想、信条の内容ではなくて、現象に敏感に反応して意識のなかに受けとめていくための適性である。

のちに *March Moonlight* でこのときのことをふりかえて、‘Neither of these moments were contrived. Without prelude, they opened before us. Surprising. New’.²⁷⁾ と言っているが適切な雰囲気と呼吸の一致という条件を与えられて、何の前触れもなく例の瞬間が訪れたことは Miriam にとっても全く新しい経験だったのである。他の男たちとの場合にはさまざまな音色の prelude があって、融合の達成をさまたげていたことが暗に示されていると思われる。

Miriam の存在を平和な自己充足的な Quaker の世界への闖入とみなす家族の妨害により、また彼自身の打算も働いて、彼女は追われるごとく Dimple Hill を去るのであるが、彼の個性の呪縛から解放されてはじめて、「環境から切り離れた Richard は私にとって意味を持たない²⁸⁾」、「彼には強力なライバルである自然に打ち勝つ力はない」と自覚するにいたる。一度はある種の教養を彼に認めたものの、農耕と信仰生活しかなく、芸術や学問とは無縁の彼には長く彼女の心をつなぎとめる力はなかったと見られる。Miriam が彼に認めた教養は何であるか、また彼の人間としての魅力の本質は何であるか明らかにされないが、この時点での彼女は Quaker 的世界観の光芒のなかで人やものを見ているきらいがあり、Richard の人格のとらえ方が多分に観念的であることは否定できない。二つの貴重なモメントを Miriam の遍歴に刻んで彼もまた視界から消えていく。

ここまで書き上げる数年前に Richardson は夫を失っていたのであるが、すでに80才に迫ろうとしていた彼女は書き続ける気力をなくして筆を折ったようである。Blake は Quaker 的世界観への到達をもって Miriam の真理探究は極められたと述べているが、Richardson 自身は結婚後 Quaker に対する関心を殆んど失い、Spiritualism に心を開き始めていた形跡があると Gregory は言っている。Quaker の世界観から抜け出るまでの模索、次の世界観へ到達するまでのみちすじは曲折の多いものであったろうが、われわれの想像はここで断ち切られる。しかし真の人間関係を求めての旅の結末と収穫は、作者の結婚生活の概略と、*Pilgrimage* のさし出す状況証拠から想像してみることはできる。

一つの手がかりは作者の死後出版された *March Moonlight* の幕が降りる直前の場面に見出される。そこには Richard との恋も不成功に終って、次の漂泊の地でいこいを求める Miriam と新しい個性を持った男性との運命的な出会いが記録されている。‘Curiously smoothed voice, neither weak nor strong’, ‘tattered garments compelled to elegance by his bearing’, ‘dark hazel-brown eyes looking through me into space’²⁹⁾ の持主として紹介されるこの青年画家 Noble が作者の夫 Odle であることは Gregory も指摘しているが、この魅力ある個性の放つ光と香気を全身で受けとめながら、何かを期待している Miriam の心情はこうした特徴的な形容からわれわれにもじかに伝ってくる。年長の女性と結婚することで家族から見放されることになる、虚弱体質の、芸術家肌のこの青年を愛し庇護することで、Miriam はこれまで背負ってきた自分の肉親に対する罪を償うことになり、これをもって *Pilgrimage* に託されていた課題は果されることになると、Gregory は作者の実生活から Miriam の男性遍歴の成り行きを見通して述べて

いる。肉親に対する罪とは、病苦に耐えかねて自殺した母の死をくいとめられなかった自己の無力と、身分不相応の genteel な生活へのあこがれを最後まで断ち切れなかった父に対する無理解のことであるが、こうした見かたの妥当性は別として、作中で ‘a gentleman, Mr. Noble is, if ever there was one’ と第三者にも語らせているこの男性の genteel な個性が、さきに「祖先の生きてきた道への訣別」を表明してもなお意識下にのこる social status への淡い憧憬に応えるものであることは想像できる。また、‘An enchanting being, fragile, delicate to the last degree’ と作者のよき理解者の一人 John Cowper Powys が評している Odle の個性はおそらく Richardson がこれまでに出会ったどのような男性にも見られなかったものであったに違いない。Miriam が男性は百万人の中の一人も作り出すことはできないと言った sense of atmosphere を彼ならば受けとめ、あるいは作り出すことができたのではないかと想像される。そのような二人は初対面から靈感のようなものを互いの人格から感じ取り、prelude なしに完璧に出会い、神秘的な調和を達成したことであろう。そして並んで坐って、多くを語らないで、心と心が融け合うのを感じたことであろう。彼女の比喩を借りると、ものに向かって、もののなかで出会ったことであろう。そのものとは、二人で見つめた人生の真実の一つ一つであるほかに、彼らが住む Cornwall の海岸の荒涼とした風景であったり、彼らの粗末な小屋に吹きつける風の音であったろう。あるいは新聞を通じて伝わる懐しいロンドンの消息であったり、H. G. Wells を含めた友人たちの死去の知らせでもあったろう。そして晩年に知った Spiritualism の影響のもとで、やがて訪れる死ののちの神秘の世界での出会いの光景でもあったろう。

極めて大ざっぱにはあるが、Richardson と夫の関係を想定してみると、彼女が比喩的また抽象的に描出している理想的な人間関係の実体を見る手がかりとしたが、この想像のわくを超えたものとして、いくつかの疑問点が残る。例えば endless perspective とか instant of eternity とは神秘的な世界観から眺めた展望をいうのか、現象の背後にあるものについての直観的観照を指すのか、あるいは単に意識の高揚を指すのか。またこのような人間関係に shared belief を条件としている場合もあるが、特定の思想、信仰を意味しているのか、それとも広い意味での人世観、世界観を指すのか。作中の人々との交渉からも、Richardson の実生活についての証言からも、思想的な基盤に立った人間関係は浮び上ってこないが、人間存在の根本原理究明に向かう Miriam の一貫した真摯な姿勢から見て、そこから到達した究極的な vision の共有は彼女の示そうとする人間関係の必須の条件と当然想像される。それにもかかわらず、思想的な基盤を異にする Densley との間でも持つことのできた永遠に通じる瞬間、それは具体的にはどのような心象を指すのか、なお疑問として残る。

また通常「愛」とよばれている情緒の作り出す状況との関係はどうなるのであろうか。Richardson は *Pilgrimage* のなかで、まれにはあるが激しい恋愛感情の内面描写もしている。一つの例は Michael との関係に見られるが、彼に対する愛の激情の通過が ‘known highway’, ‘celebrated nature of her experience’, ‘voyage swift and transforming’³⁰⁾ などのように表現されて、刹那的な周知の経験としてとらえられ、それに激しさと盲目性を象徴する ‘swirling darkness shot with darting flame,’ ‘flame-lit darkness’ というようなイメージが配されている。それに対して、ここでとり上げている状況には光と平和な雰囲気のみならず、未知の世界への探検にのり出す pioneer のイメージが使われたりして、きわめて対照的なものとして扱われている。つまり

刹那的、盲目的な激情を超えたところから始まる、静かな、それでいて創造的な力にみちた境地としてとらえられていることがわかる。拡大して解釈すれば、必ずしも恋人同士に限定されるものではなく、特殊な才能を前提とするものでもなく、人生のなまの現実に対応する目を開くことができれば、だれにでも現出可能な境地と考えてもよいと思う。愛において人と人との間をつなぐ不思議な力関係をこのように真摯な態度であくことなく追求した例はほかに見られないと言っても過言ではない。人間存在の根本原理の追究に専心する一女性の魂の記録のすべてが普遍性を持つとは言えないかも知れないが、その深みから見つめた人間関係の模索は、生命の放つ不思議な力を見逃し勝ちなわれわれにとって多くの示唆を含んでいると思われる。

Notes

- 1) Dorothy Richardson: *Pilgrimage* IV, (J. M. Dent & Sons Ltd. 1967, p. 534.
- 2) *Pilgrimage* III, p. 14.
- 3) *Ibid.*, p. 275.
- 4) *Pilgrimage* IV, p. 622.
- 5) *Pilgrimage* I, p. 319.
- 6) *Pilgrimage* II, p. 202.
- 7) *Ibid.*, p. 209.
- 8) *Ibid.*, p. 363.
- 9) *Ibid.*, p. 101.
- 10) *Ibid.*, p. 196.
- 11) *Pilgrimage* III, p. 63.
- 12) *Ibid.*, p. 77.
- 13) *Ibid.*, p. 212.
- 14) *Ibid.*, p. 193.
- 15) *Pilgrimage* II, p. 188.
- 16) *Pilgrimage* III, p. 189.
- 17) *Ibid.*, p. 72.
- 18) *Pilgrimage* IV, p. 146.
- 19) *Ibid.*, p. 145.
- 20) *Ibid.*, p. 645.
- 21) *Ibid.*, p. 153.
- 22) *Ibid.*, p. 141.
- 23) *Ibid.*, p. 221.
- 24) *Ibid.*, p. 222.
- 25) *Ibid.*, p. 228.
- 26) *Ibid.*, p. 478.
- 27) *Ibid.*, p. 622.
- 28) *Ibid.*, p. 546.
- 29) *Ibid.*, p. 655.
- 30) *Pilgrimage* III, p. 193.

Bibliography

- Blake, Caesar R. *Dorothy Richardson*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1960.
- Gregory, Horace. *Dorothy Richardson: An Adventure in Self Discovery*. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1967.
- Powys, John C. *Dorothy M. Richardson*. London: Joiner & Steele, 1931.
- Richardson, Dorothy. *Pilgrimage*, 4 volumes. London: Dent & Sons, 1967.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*. London: The Hogarth Press, 1949.

Summary

Along with Miriam's quest for the ultimate truth about the reality of life, which has been pointed out by Caesar Blake to be the central theme of the apparently chaotic world of *Pilgrimage*, there can be found another quest, that is, the quest for the right kind of relationship between personalities, especially when poised for the love experience. Dorothy Richardson does not tell us explicitly what takes place between Miriam and her lovers, when, according to her principle, they are made to sit, not confronted, but side by side, and meet in the light of what they see. In the way, however, she relates the many love affairs of Miriam, we can see that her concept of a vital relationship between personalities is based on their common or shared susceptibility to the realities of life. We seem to see an embodiment of this concept of hers in her own married life, the conditions of which we may take to be the ultimate goal of this other quest by Miriam.